

東海地域における南海トラフ沿いの歴史地震津波に関する 現地調査結果について(その3)

久永哲也*(1)・内田篤貴(1)・椋代大暉(2)・佐々木哲朗(2)・小川典芳(2)・浦谷裕明(3)・武村雅之(4)・都築充雄(4)

(1)日本物理探査株式会社 (2)中部電力株式会社 (3)中部電力パワーグリッド株式会社

(4)名古屋大学減災連携研究センター

§ 1. はじめに

筆者らは、南海トラフ沿いの歴史地震による地震・津波像について理解を深めるため、明応東海地震を中心に現地調査等を実施してきた。本報告では、南海トラフ沿いで発生した地震に関する被害記録や伝承に関する調査結果を報告する。

§ 2. 愛知県豊川市周辺(豊川の瀬替え)

愛知県を流れる豊川について、『参河国聞書』に「明応(中略)同七戊午年天変六月十一日、天下同時地震。廿五日、辰刻大地震三州豊川吉田川の瀬替ル。今ノ古川乎。」とされる記述がある。

豊川の瀬替えに関して、18世紀末に描かれた『諸国古城之図』の瀬木城に関する絵図では、「今ハ古川ト成(中略)今ノ川筋ハ是ヨリ四五町東南ノ方ヲ通流」と書かれており、豊川は瀬木城の東側を流れている様子が描かれている。

この瀬木城は明応二(1493)年に、牧野成時(古白)という人物により築城され、その後牧野成時は今橋城を築城、永正二(1505)年に今橋城(現、吉田城)の城主となった。この今橋城は、かつての居城であった瀬木城と、豊川によって結ばれていたとされ、永正三(1506)年に今橋城が今川家に攻められ、牧野成時が舟で瀬木城に落ち延びたとする記述(『牛窪密談記』、元禄十四(1701)年成立)が確認された。

これらのことから、永正三(1506)年には瀬木城から今橋城まで豊川が繋がっていたと考えられ、1498年明応東海地震においては旧河道から現在の豊川の河道へと変わるような大きな変化が無かった可能性がある。

なお、『参河国聞書』や『諸国古城之図』の瀬木城の図では、豊川の旧河道が「古川」と呼ばれていることが記載されているが、同地周辺の字を確認すると、古川という字名が複数確認でき、それらを旧河道と比較すると概ね一致することが確認された。

§ 3. 静岡県松崎町周辺

羽鳥(1977)によると安政東海地震で「旧各村の記録に松崎村190戸浸水とある反面、1930年代に実施された旧松崎村の調査では、標高2~4mの

区域が津波の被害から免れた」とあり矛盾を指摘し、津波の高さとしては3~4.5mと推定している。

筆者らの調査で確認された史料である[「有寿退隠中記事録」(松崎町在住の近藤氏の曾祖父である近藤平三郎氏の日記)]には、掛川藩の命により、津波で被害を受けた下田に曾祖父である近藤平三郎が指揮をとり、米を運んだことが記されている。旧松崎村から下田への支援のための米を運んだことからすれば、被害の程度は、旧松崎村より下田の方が甚大であったと考えられる。

「有寿退隠中記事録」には松崎町での大きな地震被害や津波被害に関する記述はないこと、川の氾濫などの記述があることを確認した。

また、近藤氏によれば、関東大地震(1923年)の時の方が1854年安政東海地震、1855年安政江戸地震、1891年濃尾地震より大きく揺れたと周囲の人が言っていたと記憶しているそうである。

§ 4. 和歌山県那智勝浦周辺(補陀洛山寺)

『熊野年代記』(影印本)では、「(宝永)丁亥四〇十月四日未ノ上刻大地震町屋ヲ崩ス人死有浦々津浪入悉屋流濱ノ宮観音堂石ツエヲ離ル補陀洛寺海キハヘ流ル(後略)」とあり、宝永地震において補陀洛山寺が津波により動いたこと等が記載されている。

郷土史家の村田氏への聞き取り調査により、「境内には安政か宝永の地震津波によって漂着したサンゴの塊がある」という情報を確認し、熊野三所大神社の境内にある渚の森の前において現存することを確認した。

§ 5. まとめ

被害程度を正しく評価するには、被災した建造物、集落の位置を正確に再現することが重要である。そのためには、地震史料だけでなく、歴史的背景、周囲の地形等を含めた総合的視点から解釈することが必要である。今後も歴史記録を防災・減災に役立てていくため調査を進めていきたいと考えている。

§ 6. 謝辞

調査に際し、ご協力いただきました郷土史家の村田氏ならびに松崎町の近藤氏に深く感謝いたします。